
実践報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究11
P.65-75 (2023)

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」 実践報告(第2報) —チーム活動による学生の協同作業認識と日常生活スキルの変化—

Practical Report on the “Exploration Practicum in Community-based Integrated Care” Newly Established in the 2022 Curriculum (2nd report); Changes in Students’ Belief in Cooperation and Daily Life Skills as a result of team activities

藤尾 祐子*
FUJIO Yuko

辻川 比呂斗*
TSUJIKAWA Hiroto

山本 哲子*
YAMAMOTO Tetsuko

野津 美香子*
NOTSU Mikako

榎本 佳子*
ENOMOTO Yoshiko

石塚 淳子*
ISHIDUKA Junko

影山 孝子*
KAGEYAMA Takako

川田 梨絵*
KAWATA Rie

平岡 玲子*
HIRAOKA Reiko

鈴木 江利子*
SUZUKI Eriko

依田 真由子*
YODA Mayuko

土居 稚奈*
DOI Wakana

酒井 太一*
SAKAI Taichi

林 亮*
HAYASHI Ryo

中林 菜穂*
NAKABAYASHI Nao

山本 多恵子*
YAMAMOTO Taeko

要 旨

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」において、チーム活動による実習前後の学生の協同作業に対する認識と日常生活スキルの変化について、協同作業認識尺度と日常生活スキル尺度(大学生版)を用いてアンケート調査を実施した。協同作業認識尺度の仲間と共に作業することによる有効性を示す【協同効用】は有意に上昇し、仲間との協同を回避し一人での作業を好む【個人志向】と、協同作業から得られる恩恵は人によって異なることを示す【互恵懸念】は有意に低下した結果から、実習前後で学生の協同作業に対する認識の向上が認められた。また、日常生活スキル尺度(大学生版)では8因子中、【前向きな思考】以外の7因子が有意に上昇した結果から、実習前後で学生の日常生活スキルの向上が認められた。特に、0.5ポイント以上上昇を認めた因子は、対人スキルである【リーダーシップ】、個人的スキルである【計画性】と【情報要約力】であった。「地域包括ケア探索実習」の前後で、学生の協同作業に対する認識と日常生活スキルが向上した背景に、実習構成における課題解決型のチーム活動が影響したと示唆される。

索引用語：地域包括ケア探索実習、チーム活動、学生、協同作業認識、日常生活スキル

Key words : exploration practicum in community-based integrated care, team activities, students, belief in cooperation, daily life skills

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

(Nov. 17, 2022 原稿受付) (Jan. 23, 2023 原稿受領)

1. 緒 言

2022年4月の看護基礎教育における保健師助産師
看護師学校養成所指定規則の第5次改正¹⁾に伴い、順

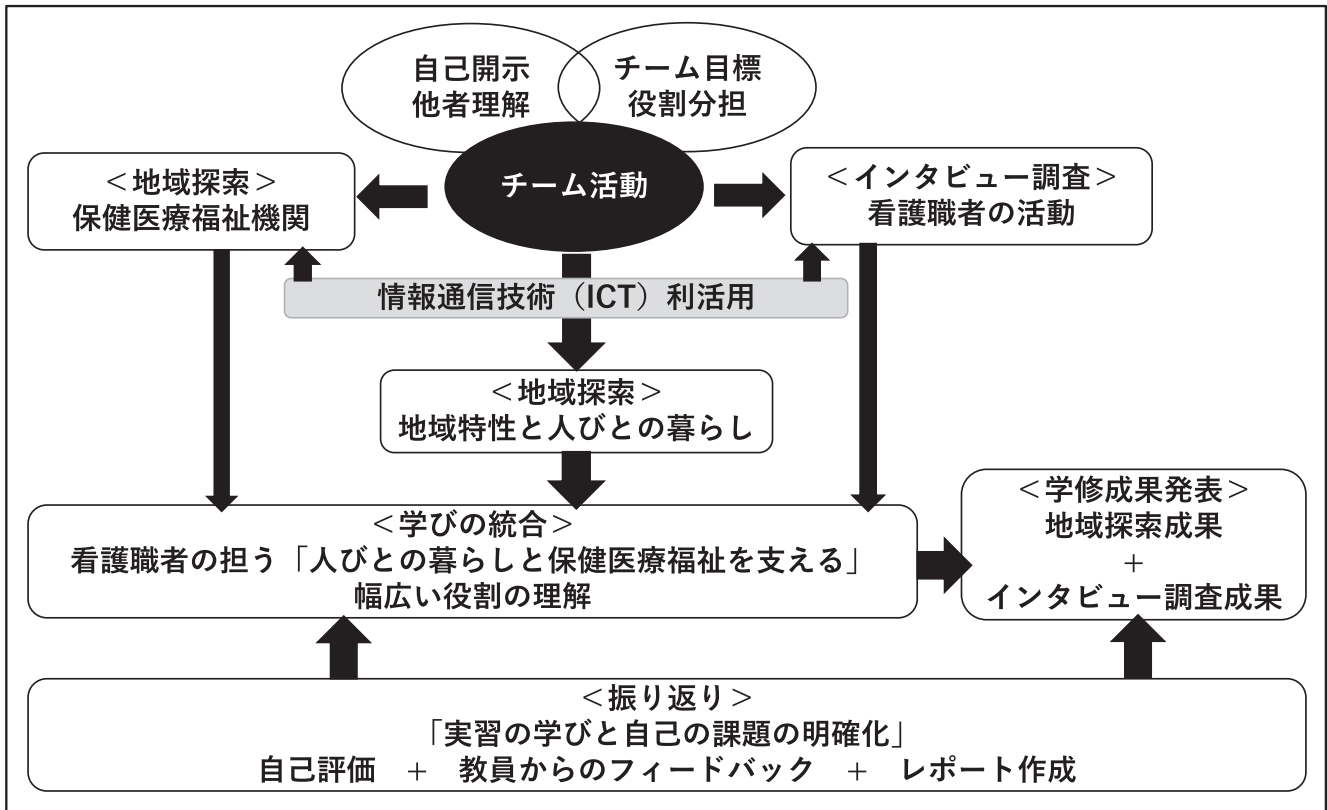


図1 地域包括ケア探索実習の概念図

天堂大学保健看護学部もカリキュラムを改定し、臨地実習を再編して「地域包括ケア探索実習」を1年前期に新設した。「地域包括ケア探索実習」は、看護の対象である地域で生活する人びとと環境、人びとを支える保健医療福祉分野での看護職者の活動について理解することを目的とした。この目的達成のために課題解決型の実習構成とし、日々の実習はチーム活動により展開した。

チームとは、ある目的のために協力して行動する集まりであり、チーム活動とは、1人では解決できない問題を解決する、1人ではつくりえない変化を生み出すための活動である²⁾。これに対し、グループとは単なる集団をいい、チームとの違いは達成すべき共通の目的があるか否かである。グループ活動ではなくチーム活動と表現することで、仲間とともに課題を解決し皆でつくり上げる実習であると学生の自覚を促した。また、チーム活動は協同作業であり、協同とは、同じ目

的のために複数の個人がともに心と力を合わせ助け合って仕事をするここといい³⁾、協同作業とは、協同を具現化する行為に重きを置いた概念である⁴⁾。協同作業認識尺度の開発者である長濱は、「相対的に協同作業に否定的な認識をもつ高校生を受け入れ、大学教育に適応させるためには、学生の協同作業に対する認識を高める働きかけが必要で、これは、大学における初年次教育が解決すべき中心的な課題の一つである」と提言している⁵⁾。そこで、入学間もない学生の協同作業に対する認識を高めることを目的として、地域包括ケア探索実習をチーム活動により展開することとした。

また、協同的なグループ活動による学びの効果として社会的スキルの学習効果が示されている⁶⁾。この社会的スキルを含む日常生活スキル (Daily Life Skills) について世界保健機関 (World Health Organization : WHO) は、「ライフスキルとは、日常的に起こる様々な問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処

表1 実習目的・実習目標および行動目標

<実習目的>

看護職者の様々な活動を看護学教育の早期に学修し看護を学ぶ動機づけとすることを目的に、フィールド体験実習である地域包括ケア探索実習を1年前期の入学直後に履修する。順天堂大学保健看護学部が位置する地域において、地域の特性と人びとの暮らしを知り、少子高齢社会のニーズである地域包括ケアにおける保健医療福祉の拠点となる機関および各機関での看護職者の活動を主体的に探索することで、看護職者の担う「人びとの暮らしと保健医療福祉を支える」多様で幅広い役割を理解する。また、実習にあたってはチームを形成し、チームの一員としての役割を学ぶ。

<実習目標・行動目標>

1. 地域を探索して地域の特性や人びとの暮らしを理解する。
 - 1) 情報通信技術 (ICT) を利活用して、地域を探索する準備ができる。
 - 2) 地域探索を通して、地域特性と人びとの暮らしを説明できる。
2. 地域を探索して保健医療福祉機関を調べ、各機関での看護職者の活動と役割を理解する。
 - 1) 地域探索を通して保健医療福祉機関を調べ、機能や役割を説明できる。
 - 2) インタビュー調査を通して、各機関での看護職者の活動や役割を説明できる。
3. チームを形成して実習し、メンバーとの相互理解を深め、チームの一員としての役割を学ぶ。
 - 1) チームメンバーに自己開示ができ、他者の意見を傾聴できる。
 - 2) チームメンバーと協力し、課題に取り組むことができる。
 - 3) チーム活動を通して、看護職者に必要な協働する力の必要性について説明できる。
4. 看護学生として責任ある態度で行動する。
 - 1) 看護学生として、ふさわしい身だしなみで実習できる。
 - 2) 実習に関わるすべての人に対して、丁寧な言葉遣いや挨拶ができる。
 - 3) 自己の体調管理ができ、体調変化を報告できる。
 - 4) 実習で知り得た情報等の守秘義務を守ることができる。
5. 実習を通して学んだことを振り返り、自己の課題を明らかにする。
 - 1) 実習の学びを言語化し、成果を他者に伝えることができる。
 - 2) 実習での体験を振り返り、実習の学びと今後にむけた自己の課題を述べることができる。

するためのスキル」と定義し、1994年各国の学校の教育課程にライフスキルの修得を導入することを提唱している⁷⁾。この日常生活スキルは、チーム活動により課題解決を課している「地域包括ケア探索実習」において、学生がチーム活動を展開するために必要とされるスキルでもある。

そこで第2報では、「地域包括ケア探索実習」のチーム活動により、実習の前後で、学生の協同作業に対する認識と日常生活スキルがどのように変化したかを報告する。協同作業に対する認識の変化は協同作業認識尺度⁴⁾を用い、日常生活スキルの変化は日常生活スキル尺度 (大学生版)⁸⁾を用いてアンケート調査を実施した。

II. 用語の操作的定義

本研究におけるチーム活動とは、1人では解決できない問題を解決する、1人ではつくりえない変化を生み出すための活動をいう²⁾。「地域包括ケア探索実習」における地域包括ケアとは、あらゆるライフステージ・健康レベルの人びとの暮らしを地域で支えるためのケアをいう⁹⁾。

III. 実習概要 (図1)**1. 実習目的および実習目標 (表1)**

実習目的、実習目標、行動目標を表1に示す。

表2 実習内容

実習日	実習課題	実習内容
1日目	導入	オリエンテーション 事前学習：用語の調べ学習と自己目標の設定
2日目	チーム形成	自己開示・他者理解とチーム目標の設定・役割分担 地域探索：やさしいマップ作り
3日目	地域探索	ICT利活用による準備：地域特性と人びとの暮らし ICT利活用による準備：保健医療福祉機関
4日目	地域探索	地域探索：地域特性と人びとの暮らし
5日目	地域探索	地域探索：保健医療福祉機関
6日目	インタビュー調査	ICT利活用による準備：インタビュー調査機関 インタビュー調査準備：インタビューガイド作成とロールプレイ
7日目	インタビュー調査	看護職者へのインタビュー調査
8日目	学びの統合	地域探索とインタビュー調査のまとめ
9日目	学びの統合	学修成果発表の準備：発表抄録作成 学修成果発表の準備：ポスター作成
10日目	学修成果発表	ポスターセッション 学びの共有
11日目	振り返り	実習の自己評価 担当教員からのフィードバック
12日目	振り返り	実習体験の振り返り 実習の学びと自己の課題の明確化

2. 実習内容（表2）

実習内容を表2に示す。実習方法は実習目的、実習目標を達成するため、日々、実習課題を提示しチーム活動により解決する課題解決型の実習とした。実習期間は12日間とし、実習時間は1日5コマ10時間と設定した。

3. 実習のチーム編成とチーム活動を促進する工夫

チーム編成は、1年次生134名を学籍番号順に1チーム6～7名配置した。チーム活動を促進する工夫として、実習期間を通してチーム目標を設定した。ま

た、チーム内での役割分担としてチームリーダー、サブリーダー、時間管理係、連絡係、記録係、物品係のいずれかを担うこととした。日々の実習では、午前・午後に提示された課題を解決するためチームで協同作業を行い、午前・午後ともに終了時に各自の振り返り→チームでの共有→学年全体での共有を行った。

4. 実習場所

本学部のある静岡県三島市を5地区に分けて地域探索を行った。5地区は介護保険制度における地域包括支援センター¹⁰⁾の担当地区とした。地域包括支援セン

ターは、地域包括ケアシステムにおける要となる機関である。保健医療福祉機関探索およびインタビュー調査は、高度急性期病院、訪問看護ステーション、保健センター、企業、教育機関、保育所、特別支援学校、地域包括支援センター、高齢者介護施設、居宅介護支援事業所とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

自記式質問紙アンケート調査の結果について量的記述的に分析した。

2. 対象者

順天堂大学保健看護学部 2022 年度 1 年次生 134 名を対象とした。

3. データ収集方法

実習初日と実習最終日に、学習支援システムを活用した Web アンケート調査を実施した。協同作業認識尺度をリッカートスケール 5 件法により、日常生活スキル尺度（大学生版）をリッカートスケール 4 件法により行った。なお、両尺度ともに、開発者に使用承諾を得て調査を実施した。

4. 調査内容

1) 協同作業認識尺度

協同作業認識尺度は、長濱らが開発した協同作業の認識を測定する 3 因子 18 項目で構成された尺度である。尺度の開発者である長濱は、学習環境を整えても、そこに参加する学生が自他の利益のために心と力を合わせ、助け合おうという協同作業をどのように認識しているかにより、協同学習の効果は著しく異なると指摘している⁴⁾。そこで、入学間もない学生が、実習において体験する協同作業、すなわちチーム活動に対する認識が実習の前後でどのように変化したかを調

査することとした。尺度の第 1 因子【協同効用】は仲間と共に作業することによる有効性を示す因子、第 2 因子【個人志向】は仲間との協同を回避し一人での作業を好む因子、第 3 因子【互惠懸念】は協同作業から得られる恩恵は人によって異なることを示す因子である。また、協同作業認識尺度 3 因子の信頼性は、クロンバックの α 係数が .64 ~ .84 でありおおむね満足できるものである。

2) 日常生活スキル尺度（大学生版）

日常生活スキル尺度（大学生版）は、島本らが開発した社会的スキルを内包するライフスキルを多面的に測定できる 8 因子 24 項目で構成された多次元の尺度⁸⁾である。この尺度は主に個人場面で展開されるスキルを表す個人的スキル（計画性、情報要約力、自尊心、前向きな思考）と、主に対人場面で展開されるスキルを表す対人スキル（親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナー）という 2 つに大きく分類される。第 1 因子【親和性】は友人たちと親密な関係を形成・維持するスキル、第 2 因子【リーダーシップ】は自分が属する集団内での活動に積極的にかかわっていかこうとするスキル、第 3 因子【計画性】は時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキル、第 4 因子【感受性】は相手の気持ちへ感情移入するスキルである。第 5 因子【情報要約力】は情報を扱うスキル、第 6 因子【自尊心】は現在のありのままの自分を肯定的にとらえることができるスキル、第 7 因子【前向きな思考】は落ち込んだときや失敗したとき、困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキル、第 8 因子【対人マナー】は相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである。また、日常生活スキル尺度（大学生版）8 因子の信頼性は、クロンバックの α 係数が .63 ~ .87 でありおおむね満足できるものである。日常生活スキル尺度（大学生版）を使用した先行研究では、看護学科 1 年次生のコミュニケーション・スキルの向上に日常生活スキルの「情報要約力」および「計

画性」の充実が示唆されている¹¹⁾。そこで、実習のチーム活動により、日常生活スキルが実習の前後でどのように変化したを調査することとした。

5. データ分析方法

協同作業認識尺度、日常生活スキル尺度（大学生版）ともに、実習初日と実習最終日との因子別平均得点の変化と、項目別平均得点の変化について、wilcoxonの符号付き順位検定を行った。統計解析はIBM SPSS Statistics Ver. 26.0にて行い、有意水準5%未満とした。

V. 倫理的配慮

順天堂大学保健看護学部の学部長に研究の同意を得た後、対象学生には実習オリエンテーションにて口頭と文書で研究目的、方法、倫理的配慮、調査への回答は成績や今後の学生生活に一切影響しないことを説明した。研究協力は自由意思であり同意しない場合は回答しなくてよいこと、研究の説明、データの回収、データの分析はそれぞれ別の教員が行い、個人は特定されないことを説明して強制力が働かないよう配慮し、任意性と匿名性を保障した。具体的な方法は、実習開始前と実習終了後にアンケートを配信し、回答をもって同意とみなした。なお、本研究は順天堂大学保健看護学部研究等倫理審査会の承認を得て実施した（順保倫第3-08号）。

VI. 結果

アンケート調査は、134名中132名から回答を得た（回答率98.5%）。そのうち実習前後で欠損値のない回答は、協同作業認識尺度では123名（有効回答率91.3%）、日常生活スキル尺度（大学生版）では125名（有効回答率93.3%）の回答を分析対象とした。

1. 協同作業認識尺度の結果

因子別平均得点を実習初日と実習最終日で比較する

と、【協同効用】は 38.4 ± 5.0 点から 42.1 ± 4.3 点へ有意に上昇した。【個人志向】は 15.8 ± 3.8 点から 12.6 ± 4.0 点へ有意に低下した。【互惠懸念】は 5.5 ± 2.0 点から 4.7 ± 1.9 点へ有意に低下した（表3）。

項目別平均得点を実習初日と実習最終日で比較すると、【協同効用】の下位項目では9項目全てが有意に上昇した。特に0.5ポイント以上上昇した項目は、「協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる」「個性は多彩な人間関係の中で築かれていく」「グループのために自分の力（才能や技能）を使うのは楽しい」「能力が高くない人たちでも団結すれば良い結果を出せる」であった。【個人志向】の下位項目では6項目全てが有意に低下した。特に0.5ポイント以上低下した項目は、「みんなで一緒に作業すると、自分の思うようにできない」「失敗した時に連帯責任を問われるくらいなら、一人でやる方がよい」「みんなで話し合っていると時間がかかる」「グループでやると必ず手抜きをする人がいる」であった。【互惠懸念】の下位項目では3項目全てが有意に低下した。他の因子と比べて0.5ポイント以上変化した項目はなかった（表4）。

2. 日常生活スキル尺度（大学生版）の結果

因子別平均得点を実習初日と実習最終日で比較すると、8因子中7因子が有意に上昇した。【親和性】は 9.5 ± 1.8 点から 10.3 ± 1.7 点、【リーダーシップ】は 7.7 ± 1.8 点から 9.1 ± 2.0 点、【計画性】は 7.9 ± 1.9 点から 9.6 ± 1.9 点、【感受性】は 9.9 ± 1.7 点から 10.5 ± 1.4 点、【情報要約力】は 8.2 ± 1.6 点から 9.8 ± 1.6 点、【自尊心】は 8.1 ± 1.7 点から 9.0 ± 1.8 点、【対人マナー】は 10.5 ± 1.5 点から 11.0 ± 1.3 点へ有意に上昇した。【前向きな思考】は 8.4 ± 2.0 点から 8.5 ± 1.9 点へ上昇したが、有意差は認めなかった（表5）。

項目別平均得点を実習初日と実習最終日で比較する

表 3 協同作業認識尺度の因子別平均得点の変化

n=123

因子	実習初日		実習最終日		p値
	平均得点	(± 標準偏差)	平均得点	(± 標準偏差)	
協同効用	38.4	(± 5.0)	42.1	(± 4.3)	<0.001
個人志向*	15.8	(± 3.8)	12.6	(± 4.0)	<0.001
互惠懸念*	5.5	(± 2.0)	4.7	(± 1.9)	<0.001

Wilcoxon の符号付き順位検定 * 反転項目

表 4 協同作業認識尺度の項目別平均得点の変化

n=123

項目	実習初日		実習最終日		差 (実習最終日-実習初日)	p値
	平均得点	(± 標準偏差)	平均得点	(± 標準偏差)		
協同効用						
1. たくさんの仕事でも、みんなと一緒にやれば出来る気がする	4.4	(± 0.8)	4.8	(± 0.6)	0.4	<0.001
2. 協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる	3.7	(± 0.9)	4.3	(± 0.9)	0.6	<0.001
3. みんなで色々な意見を出し合うことは有益である	4.7	(± 0.6)	4.8	(± 0.5)	0.1	0.002
4. 個性は多様な人間関係の中で築かれていく	4.2	(± 0.8)	4.7	(± 0.7)	0.5	<0.001
5. グループ活動ならば他の人の意見を聞くことができるので自分の知識も増える	4.7	(± 0.6)	4.9	(± 0.5)	0.2	<0.001
6. 協同はチームメイトへの信頼が基本だ	4.4	(± 0.7)	4.8	(± 0.6)	0.4	<0.001
7. 一人でやるよりも協同したほうが良い成果を得られる	4.2	(± 0.8)	4.6	(± 0.8)	0.4	<0.001
8. グループのために自分の力 (才能や技能) を使うのは楽しい	4.1	(± 0.8)	4.7	(± 0.6)	0.6	<0.001
9. 能力が高くない人たちでも団結すれば良い成果を出せる	3.9	(± 1.0)	4.5	(± 0.9)	0.6	<0.001
個人志向						
10. 周りに気遣いしながらやるより一人でやる方が、やり甲斐がある	2.8	(± 1.0)	2.4	(± 1.2)	-0.4	0.004
11. みんなと一緒に作業すると、自分の思うようにできない	2.5	(± 0.9)	2.0	(± 0.9)	-0.5	<0.001
12. 失敗した時に連帯責任を問われるくらいなら、一人でやる方が良い	2.2	(± 1.0)	1.7	(± 0.8)	-0.5	<0.001
13. 人に指図されて仕事はしたくない	2.3	(± 1.0)	2.1	(± 1.0)	-0.2	0.045
14. みんなで話し合っていると時間がかかる	2.8	(± 1.1)	2.2	(± 1.1)	-0.6	<0.001
15. グループでやると必ず手抜きをする人がいる	3.2	(± 0.9)	2.0	(± 1.0)	-1.2	<0.001
互惠懸念						
16. 協同は仕事の出来ない人のためにある	2.0	(± 0.8)	1.7	(± 0.8)	-0.3	0.005
17. 優秀な人たちがわざわざ協同する必要はない	1.8	(± 0.8)	1.5	(± 0.7)	-0.3	0.001
18. 弱い者は群れて助け合うが、強い者にはその必要はない	1.8	(± 0.8)	1.4	(± 0.7)	-0.4	<0.001

Wilcoxon の符号付き順位検定

表 5 日常生活スキル尺度 (大学生版) の因子別平均得点の変化

n=125

因子	実習初日		実習最終日		p値
	平均得点	(± 標準偏差)	平均得点	(± 標準偏差)	
合計	70.2	(± 7.9)	77.9	(± 8.8)	<0.001
親和性	9.5	(± 1.8)	10.3	(± 1.7)	<0.001
リーダーシップ	7.7	(± 1.8)	9.1	(± 2.0)	<0.001
計画性	7.9	(± 1.9)	9.6	(± 1.9)	<0.001
感受性	9.9	(± 1.7)	10.5	(± 1.4)	<0.001
情報要約力	8.2	(± 1.6)	9.8	(± 1.6)	<0.001
自尊心	8.1	(± 1.7)	9.0	(± 1.8)	<0.001
前向きな思考	8.4	(± 2.0)	8.5	(± 1.9)	0.224
対人マナー	10.5	(± 1.5)	11.0	(± 1.3)	<0.001

Wilcoxon の符号付き順位検定

表6 日常生活スキル尺度（大学生版）の項目別平均得点の変化

n=125

項目	実習初日		実習最終日		差 (実習最終日-実習初日)	p値
	平均得点	(± 標準偏差)	平均得点	(± 標準偏差)		
親和性						
1. 困ったときに、友人らに気軽に相談することができる	3.2	(± 0.7)	3.5	(± 0.7)	0.3	<0.001
2. 親身になって友人らに相談に乗ってもらえることができる	3.4	(± 0.7)	3.6	(± 0.6)	0.2	<0.001
3. どんな内容のことでも友人らと本音で話し合うことことができる	2.9	(± 0.7)	3.3	(± 0.7)	0.4	<0.001
リーダーシップ						
4. 話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる	2.8	(± 0.7)	3.3	(± 0.7)	0.5	<0.001
5. 集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張って行くことができる	2.5	(± 0.8)	2.8	(± 0.8)	0.3	<0.001
6. 自分が行動を起こすことによって、周りの人を動かすことができる	2.5	(± 0.7)	3.0	(± 0.8)	0.5	<0.001
計画性						
7. 先を見通して計画を立てることができる	2.6	(± 0.7)	3.2	(± 0.7)	0.6	<0.001
8. 課題が出ると、提出期限を自ら決める等の工夫をしてやる気を引き出す	2.7	(± 0.8)	3.2	(± 0.8)	0.5	<0.001
9. やるべきことをテキパキと片付けることができる	2.6	(± 0.7)	3.2	(± 0.7)	0.6	<0.001
感受性						
10. 困っている人を見ると援助してあげたくなる	3.4	(± 0.6)	3.7	(± 0.5)	0.3	<0.001
11. 他人の幸せを自分のことのように感じることができる	3.2	(± 0.7)	3.5	(± 0.6)	0.3	<0.001
12. 悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになる	3.2	(± 0.8)	3.4	(± 0.7)	0.2	0.023
情報要約力						
13. 手に入れた情報を使って、より価値の高いもの（資料等）を生み出せる	2.6	(± 0.7)	3.2	(± 0.6)	0.6	<0.001
14. 数多くの情報から、本当に自分に必要な情報を手に入れられる	2.8	(± 0.6)	3.3	(± 0.6)	0.5	<0.001
15. 多くの情報をもとに自分の考えをまとめることができる	2.8	(± 0.6)	3.3	(± 0.7)	0.5	<0.001
自尊心						
16. 自分のことが好きである	2.7	(± 0.7)	3.0	(± 0.8)	0.3	<0.001
17. 自分の今までの人生に満足している	2.9	(± 0.7)	3.2	(± 0.7)	0.3	<0.001
18. 自分の言動に対して自信を持っている	2.5	(± 0.7)	2.8	(± 0.7)	0.3	<0.001
前向きな思考						
19. 嫌なことがあっても、いつまでもよくよと考えない	2.8	(± 0.9)	2.9	(± 0.8)	0.1	0.023
20. 困った時でも「なんとかなるだろう」と楽観的に考えることができる	3.1	(± 0.8)	3.2	(± 0.8)	0.1	0.132
21. 何かに失敗したときにすぐに自分はダメな人間だと思ってしまう*	2.6	(± 0.8)	2.4	(± 0.9)	-0.2	0.275
対人マナー						
22. 目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができる	3.5	(± 0.6)	3.6	(± 0.5)	0.1	0.005
23. 年上の人に対しては敬語を使うことができる	3.6	(± 0.6)	3.7	(± 0.5)	0.1	0.003
24. 初対面の人に対して言葉使い等に気を配ることができる	3.4	(± 0.6)	3.7	(± 0.5)	0.3	<0.001

Wilcoxon の符号付き順位検定 *反転項目

と、【前向きな思考】以外の下位項目は有意に上昇した。特に0.5ポイント以上上昇した項目は、【リーダーシップ】で「話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができる」「自分が行動を起こすことによって、周りの人を動かすことができる」であった。また、【計画性】で「先を見越して計画を立てることができる」「課題が出ると、提出期限を自ら決める等工夫をしてやる気を引き出す」「やるべきことをテキパキと片付けることができる」であった。さらに、【情報要約力】で「手に入れた情報を使って、より価値の高いもの（資料等）を生み出せる」「数多くの情報から、本当に自分に必要な情報を手に入れられる」「多くの情報を

もとに自分の考えをまとめることができる」であった（表6）。

VII. 考 察

1. 協同作業認識尺度の結果から

【協同効用】は有意に上昇し、【個人志向】と【互惠懸念】は有意に低下した。協同作業認識尺度の開発において【協同効用】を高く評価し、【個人志向】と【互惠懸念】を低く評価するほど、協同作業に対する認識が肯定的であると判定されている⁵⁾。今回の調査も同様の結果であり、他の項目に比べて【協同効用】の下位項目である「能力が高くない人たちでも団結すれば

良い結果を出せる」が0.5ポイント以上上昇し、【個人志向】の下位項目である「グループでやると必ず手抜きをする人がいる」が0.5ポイント以上低下した結果からも、実習のチーム活動による協同作業の体験を通して学生たちは、協同作業に対する認識を高めたと考えられる。

協同作業による学習は競争学習や個別学習に比べて、学習成績、対人関係、心理的適応、大学への態度の改善において優れていることが知られている¹²⁾。この背景には、高校までの教育は競争と個別を中心とした教育が主流であり、それと比較して大学では他者と協力して学ぶ機会が増えるといった高校と大学の修学システムの違いがある¹³⁾。入学間もない学生が、チーム活動により実習課題を解決し、学びを個人で振り返り、チームと学年全体で共有する体験をしたことで、競争と個別を中心とした学習から、協同して学ぶことの認識を高める機会となったと考えられる。

また、協同学習について杉江は、「グループ学習が協同学習ではない」と述べ¹⁴⁾、Jonson, Jonson, & Smithは、協同的な学習環境を創り出すために、互恵的な相互依存性・積極的相互作用・グループ目標と個人の責任の明確化・小集団技能の奨励と訓練・活動の評価の5つの原理をあげている¹²⁾。今回の調査において協同作業認識尺度の【協同効用】が上昇し、【個人志向】および【互恵懸念】が低下した結果に、実習構成におけるチーム目標の設定と役割分担、チーム活動による日々の課題解決と振り返りの繰り返しが影響したと考えられ、「地域包括ケア探索実習」のチーム活動には、これら5つの原理が含まれていたのではないかと示唆される。さらに、大学初年次学生の協同作業認識得点の変化についての研究では、入学時から学年末では時系列方向について統計的に有意な変化は発生しない、すなわち高校卒業までの受験という競争的環境から大学という環境に移って一年間経過しても、それだけで協同作業認識が大きく変わるものではないと報告

されている¹⁵⁾。入学間もない学生が、「地域包括ケア探索実習」において単に集団で活動するグループ活動ではなく、共通の目的の下、チーム活動により実習の課題を解決したことで、1人では解決できない問題をチームで解決する協同の価値を実感し、さらに、チーム活動により実習の学修成果発表として目的達成を可視化したことで、1人ではつくりえない変化をチームで生み出す協同を実感できたのではないだろうか。学生にとって、このようなチーム活動の体験が協同作業に対する認識を高めた要因であったと考える。

2. 日常生活スキル尺度（大学生版）の結果から

8因子中7因子が有意に上昇した結果から、実習のチーム活動を通して課題解決を体験したことが、日常生活スキルの対人スキルと個人的スキルともに向上させた要因と考えられる。0.5ポイント以上上昇を認めた因子は、対人スキルである【リーダーシップ】、個人的スキルである【計画性】と【情報要約力】であった。島本は、「【計画性】と【情報要約力】が効果的な学習を促進する」と述べている⁸⁾。第1報で報告した、チーム活動が実習目的および目標に対する学修成果を促進した背景に、日常生活スキルの【計画性】と【情報要約力】が影響していた可能性も考えられる。

また、看護大学生のストレス反応と日常生活スキルの関連を調査した研究では、ストレス反応に影響を及ぼす日常生活スキルは、個人的スキルの【情報要約力】であり、看護大学生のストレス低減のために【情報要約力】を高める必要性を考察している¹⁶⁾。2000年以降、大学生の対人関係能力の低下やストレスに対する耐性の低さ、ストレス対処の不適切さが指摘され、大学の学生相談室等に寄せられる相談件数は全国的に増加傾向にあると言われている¹⁷⁾。学生のストレス低減のために必要とされる【情報要約力】について斎藤は、「大量に散乱する情報の中から重要なものを選び出し、秩序立てて再構成する力」と述べている¹⁸⁾。今

回の調査においても、【情報要約力】の下位項目である「手に入れた情報を使って、より価値の高いもの（資料等）を生み出せる」「多くの情報をもとに自分の考えをまとめることができる」が0.5ポイント以上上昇した。実習において提示された〈地域探索〉の課題である地域特性と人びとの暮らし、保健医療福祉機関の役割と、〈インタビュー調査〉の課題である看護職者の活動について、事前学習やICT利活用、フィールド学習から多くの情報を得て課題解決のために情報を取捨選択し、学修成果発表にむけてチームで話し合い、ポスターや発表抄録を作成することで、秩序立てて情報を整理し、看護の対象である地域で生活する人びとと環境、人びとを支える保健医療福祉分野での看護職者の活動について理解するという、「地域包括ケア探索実習」の目的達成を促進したと考えられる。実習のチーム活動は、実習での課題解決というストレスに対処する能力の向上にもつながった。

VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、2022年度カリキュラムにおいて新設した地域包括ケア探索実習のチーム活動により、学生の協同作業認識と日常生活スキルがどのように変化したかを明らかにするための単年度調査であり、一集団の調査である。また、担当教員によるチーム活動の説明や、チーム活動実施者と調査者が同じことによる調査結果へのバイアスも否めない。そのため本調査結果を一般化することには限界があり、次年度以降も同様の調査を重ねることや、チーム活動を伴わない実習との比較も行い、教育効果を検証していく必要がある。

IX. 結論

2022年度カリキュラムで新設した「地域包括ケア探索実習」において、チーム活動による実習前後の学生の協同作業に対する認識と日常生活スキルの変化について、協同作業認識尺度と日常生活スキル尺度（大

学生版）を用いてアンケート調査を実施した。協同作業認識尺度の仲間と共に作業することによる有効性を示す【協同効用】は有意に上昇し、仲間との協同を回避し一人での作業を好む【個人志向】と、協同作業から得られる恩恵は人によって異なることを示す【互惠懸念】は有意に低下した結果から、実習前後で学生の協同作業に対する認識の向上が認められた。また、日常生活スキル尺度（大学生版）では8因子中、【前向きな思考】以外の7因子が有意に上昇した結果から、実習前後で学生の日常生活スキルの向上が認められた。特に、0.5ポイント以上上昇を認めた因子は、対人スキルである【リーダーシップ】、個人的スキルである【計画性】と【情報要約力】であった。「地域包括ケア探索実習」の前後で、学生の協同作業に対する認識と日常生活スキルが向上した背景に、実習構成における課題解決型のチーム活動が影響したと示唆される。

謝辞

第1報、第2報を通して、この度の調査に快くご協力いただいた学生の皆様、インタビュー調査にご協力くださいました地域の保健医療福祉機関の看護職の皆様、実習をご担当いただいた教員の皆様ならびに実習新設の準備にご尽力いただきました職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書（令和元年10月15日）
<<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>, (2021.10.5)>
- 2) 関島康雄：改訂 チームビルディングの技術，第1刷，経団連出版，東京，18-19, 2019.
- 3) 広辞苑 <<https://sakura-paris.org/dict/> (2021.12.21)>
- 4) 長濱文与，安永悟，関田一彦，他：協同作業認識尺度の開発，教育心理学研究，57, 24-37, 2009.

- 5) 長濱文与, 安永悟: 大学生の協同作業に対する認識の変化—対話中心授業と講義中心授業を対象に—, 人間関係研究(南山大学人間関係研究センター紀要), 9, 35-43, 2010.
- 6) 松田麗子, 牧野紀子: 保健看護学科成人看護学実習のグループ活動における協同的な学びの効果, 中部大学教育研究, 12, 99-104, 2012.
- 7) World Health Organization (WHO) (1994). Life Skills Education in Schools. Geneva.
- 8) 島本好平, 石井源信: 大学生における日常生活スキル尺度の開発, 教育心理学研究, 54, 211-221, 2006.
- 9) 公益社団法人 日本看護協会: 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護, 2015.
<<https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>, (2021.10.6)>
- 10) 厚生労働省: 地域包括支援センターについて
<<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000756893.pdf> (2022.11.12)>
- 11) 松本真由美, 小島悦子, 藤長すが子, 他: A 大学看護学科1年次生のコミュニケーション・スキルに関する研究—エゴグラム, 日常生活スキル尺度, ENDCORESによる分析—, 日本医療大学紀要, 2, 12-22, 2016.
- 12) Jonson, D. W., Jonson, F., & Smith, K. A. Cooperative learning returns to college. *Change*, 30, 26-35, 1998.
- 13) 田中健夫: 修学上の移行の契機となる行き詰まりの性質 学生相談からの示唆, 溝上真一, 藤田哲也(編)「心理学者、大学教育への挑戦」, ナカニシヤ出版, 京都, 159-188, 2005.
- 14) 杉江修治: 協同学習入門 基本の理解と51の工夫, ナカニシヤ出版, 京都, 17-23, 2018.
- 15) 甲原定房: 大学初年次学生の協同作業認識得点の変化, 山口県立大学学術情報, 11, 55-60, 2018.
- 16) 大鳥和子, 福島和代: 看護大学生のストレス反応と日常生活スキルの関連, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 21, 22-27, 2017.
- 17) 齋藤憲司: 学生相談—最近の動向1999～2001—, 学生相談研究, 23, 105-114, 2002.
- 18) 斎藤孝: 子供に伝えたいく三つの力—生きる力を鍛える—, NHK ブックス, 東京, 43-56, 2001.